

平成 2 1 年度 教員個人評価の集計・分析報告書

佐賀大学大学院工学系研究科

目 次

平成 21 年度教員個人評価について	1
1. 教員個人評価の実施状況	2
1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など	2
1.2. 教員個人評価の実施概要	2
1.2.1. 評価組織	2
工学系研究科（理工学部）評価委員会ならびに工学系研究科（理工学部）個人評価実施委員会	2
1.2.2. 実施経緯、内容、方法等	2
1.2.3. 添付資料	4
2. 理工学部学科・工学系研究科教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等	6
3. 評価領域別の集計及び分析	7
3.1. 教育の領域	7
3.1.1. 講義担当等に関する事項	7
3.1.2. 教育改善に関する事項	10
3.1.3. 教育研修・FD に関する事項	14
3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項	16
3.1.5. 学生の受賞等	17
3.2. 研究の領域	18
3.2.1. 著書、論文等の発表実績	18
3.2.2. 共同研究などに関する活動実績	19
3.2.3. 受賞等の実績	21
3.3. 国際・社会貢献の領域	22
3.3.1. 国際交流実績	22
3.3.2. 社会貢献実績	23
3.4. 組織運営の領域	26
4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価	28
4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度	28
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム	30
4.3. 評価委員からのコメント	38

平成 22 年度工学系研究科評価委員会委員名簿

平成 21 年度教員個人評価について

平成 21 年度の理工学部における教員個人評価の分析・集計が取りまとめられましたのでご報告いたします。

各教員は、4つの評価領域である教育、研究、国際交流・社会貢献及び組織運営について自己点検・評価を行い、それぞれ5段階の評価点ならびに達成率を記入しています。そして、総合評価を5段階の評価点で記入し、学部長（研究科長）に提出しました。個人評価実施委員会は、各教員から提出された個人目標申告書、教員報告書（理工学部・工学系研究科教員活動実績年次報告書（推奨様式））及び自己点検・評価書に基づいて、各自が設けた目標の達成に向けた活動という観点から審査・評価し、学科（専攻）内の総評と共に各教員にフィードバックしました。このようなプロセスを経て、この報告書がまとめられています。

個人評価実施委員のコメントによれば、教員は、理工学部（工学系研究科）全体として「おおむね良好」から「優れている」の水準にあると評価できます。特に、学生の理解力向上を図る、研究の国際水準を高める、国際交流を活発化させる、組織運営に貢献されるなど、教員各自が顕著な努力と工夫をされていることを伺い知ることができます。その一方で、「教員のアクティビティを高める必要がある」、また「教員個人の評価のバラツキもある」との指摘もあり、教員各自の一層の改善、更には意識の変革が求められています。それにはファカルティ・デベロップメント（FD：教員の資質・能力向上を目指す活動）の活性化がベースとなります。第1ステップとして学科、専攻単位でのFDを充実されることが望まれます。

平成 22 年 4 月、教員組織が「理工学部各学科講座」から「大学院工学系研究科博士前期課程各専攻講座」に移されました。このため、過渡的措置として、教員の自己点検は併任している学部学科を単位に集計し、評価実施委員としては平成 22 年度の専攻長が行うこととお認め頂いています。平成 21 年度の教員個人評価は、試行を含めると 6 回目と、教員の多くは回を重ねるにつれて妥当な自己点検・評価をされており、この度の過渡的措置が評価結果にいささかの影響も与えていないと思われます。本報告書を基に各教員は学科・専攻内に留まらず、理工学部・工学系研究科内における位置づけを見出す切掛けとされ、学科・専攻の枠を超えた活動へと発展し、継続的に自己研鑽ならび活性化に勤められることを望みます。

工学系研究科長 林 田 行 雄

1. 教員個人評価の実施状況

1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など

大学院工学系研究科（博士前期課程と博士後期課程）所属の教員（教授、准教授、講師、助教）に対して、別紙様式 1～4 に関して教員個人評価を実施し、全員から回答を得た（回答率 100%）。（平成 22.3.31 現在）

専攻	職種	対象教員数	実施率(%)
数理科学専攻	教授	7	100
	准教授 (講師を含む)	4	100
物理科学専攻	教授	8	100
	准教授	6	100
知能情報システム学専攻	教授	6	100
	准教授	5	100
	助教	4	100
循環物質化学専攻	教授	10	100
	准教授	7	100
	助教	2	100
機械システム工学専攻	教授	6	100
	准教授 (講師を含む)	6	100
	助教	5	100
電気電子工学専攻	教授	5	100
	准教授 (講師を含む)	10	100
	助教	2	100
都市工学専攻	教授	8	100
	准教授 (講師を含む)	10	100
	助教	4	100
先端融合工学専攻	教授	10	100
	准教授 (講師を含む)	9	100
	助教	3	100
工学系研究科 (合計)	教授	60	100
	准教授 (講師を含む)	57	100
	助教	20	100

(*) は現員人数

1.2. 教員個人評価の実施概要

1.2.1. 評価組織

工学系研究科（理工学部）評価委員会ならびに工学系研究科（理工学部）個人評価実施委員会

1.2.2. 実施経緯、内容、方法等

- ① 平成 22 年 3 月 3 日 理工学部評価委員会
 - ・教員報告様式の「選択項目」を決定した。
 - ・教員個人評価スケジュールを決定した。
 - ・平成 21・22 年度教員個人評価様式を決定した。
- ② 平成 22 年 3 月 11 日

・情報政策委員長から、全教員に対し、評価基礎情報データシステム入力について依頼があった。

各教員は、従来の「教員基礎情報」と「教員報告様式」に変わる「評価基礎情報データベースシステム」に入力することになった。

③ 平成 22 年 3 月 11 日

・学部長は、全教員に対し、1 年前（平成 21 年 4 月以降の採用者は採用後）に提出された「別紙様式 1（平成 21 年度活動の「個人目標申告書」）、3（平成 21 年度活動の「自己点検・評価書」）、4（平成 21 年度活動の「個人評価結果」）をメールにて送付し、平成 21 年度活動の自己点検・評価を依頼し、別紙様式 1、3、4 を 3 月 15 日から 4 月 9 日までの間に提出するよう依頼した。

同時に、平成 22 年度の各様式もメールにて送付し、別紙様式 1（平成 22 年度活動の「個人目標申告書」）の作成・提出も併せて依頼した。

④ 平成 22 年 3 月 22 日

- ・平成 21 年度教員個人評価集計と分析報告書（様式）について決定した。
- ・工学系研究科個人評価用集計シート及び理工学部・工学系研究科個人業績集約方法の様式を決定した。

⑤ 平成 22 年 4 月 1 日

- ・教員組織を大学院博士前期課程に配置した。

⑥ 平成 22 年 4 月 14 日

・研究科長は、各教員から提出された平成 21 年度の各様式（1、3、4）を各専攻長に送付した。また、同時に「平成 21 年度教員個人評価（専攻）集計と分析報告書」の様式も送付し、同報告書の作成を依頼した。（フラッシュメモリーを手渡した。）

⑦ 平成 22 年 4 月 28 日

・平成 21 年度教員個人評価集計と分析報告書（様式）の一部（研究の領域―著書、論文等の発表実績を 1 年間から 5 年間）を変更した。

⑧ 平成 22 年 6 月中旬から 7 月末

・各専攻長は、別紙様式 1、サーバーにアップロードされた評価基礎情報データシステム及び別紙様式 3 に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行い、評価結果を、別紙様式 4（平成 21 年度の「個人評価結果」）に記載の上、7 月末までに別紙様式 1・3 を含め、研究科長宛に送付した。

また、同時に、各専攻長は、平成 21 年度の個人評価結果について、各専攻の集計と分析を行い、その結果を、「平成 21 年度教員個人評価（専攻）集計と分析報告書」に記載し、研究科長へ提出した。（専攻長は、フラッシュメモリーと印刷物（ペーパー）を研究科長へ手渡した。）

⑨ 平成 22 年 8 月初旬

・研究科長は、工学系研究科個人評価実施委員会に対し、個人評価結果の審査を付託した。

⑩ 平成 22 年 8 月中旬

- ・同委員会は、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、その結果を研究科長へ報告した。

⑪ 平成 22 年 8 月中旬～下旬

- ・研究科長は、別紙様式 1、サーバーにアップロードされた評価基礎情報データシステム及び別紙様式 3「自己点検・評価書」に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、別紙様式 4（平成 21 年度「個人評価結果」）の評価内容を確認し必要があれば、評価結果の補足等及び研究科長コメントを記載した。

なお、研究科長は、審査にあたり、審査の公平性を確保するために、必要に応じ、他の職員から意見を求めることとなった。

また、研究科長は、必要に応じ、評価内容について、当該教員から意見を聴取することになった。

⑫ 平成 22 年 10 月 26 日

- ・研究科長は、自己点検・評価書に評価結果を記入した別紙様式 4（平成 21 年度「個人評価結果」）を、当該教員に封書で通知した。その際、専攻毎の平成 21 年度教員個人評価集計と分析報告書を添付した。

⑬ 平成 22 年 10 月 26 日

- ・各教員は、個人評価の結果に対して異議がある場合は、通知後 2 週間以内（11 月 9 日まで）に異議申立書（様式任意）を研究科長に提出することとなった。
（異議申立書を提出した教員はいなかった。）

⑭ 平成 22 年 11 月下旬

- ・研究科版の平成 21 年教員個人評価集計・分析報告書（案）を取り纏めた。

⑮ 平成 22 年 12 月上旬

- ・研究科長は、研究科版の教員個人評価集計・分析報告書を作成し、工学系研究科評価委員会に対し、本研究科の教員個人評価結果の総合的な検討を付託する。

⑯ 平成 22 年 12 月下旬

- ・評価委員会は、本研究科の教員個人評価結果の総合的な検討を行い、同報告書を承認し、その結果を研究科長に報告する。

⑰ 平成 23 年 1 月下旬

- ・研究科長は、「教員個人評価集計・分析報告書」を添えて工学系研究科教員の個人評価結果を学長に報告する。

1.2.3. 添付資料

国立大学法人佐賀大学大学評価の実施に関する規則（平成 17 年 3 月 1 日制定）

佐賀大学大学院工学系研究科における教員の個人評価に関する実施基準

「大学院工学系研究科における個人達成目標の指針」（教員用）

個人目標申告書（別紙様式 1）

活動実績報告書（別紙様式2）：工学系研究科・理工学部教員活動実績年次報告書（推奨
様式）に読み替え

自己点検・評価書（別紙様式3）

個人評価結果（別紙様式4）

2. 理工学部学科・工学系研究科教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等

はじめに、理工学部教員ならびに職員が組織的に一丸となって行った教育研究活動等を以下に示す。

- 平成 21 年度理工学部・工学系研究科国際パートナーシップ教育プログラム（平成 16 年度より）：
 - ☐ 相手国：中国、韓国、タイ
 - ☐ 数理科学科、物理科学科、電気電子工学科、機械システム工学科、機能物質化学科、都市工学科の教員（一部）が参画
- 大学院（工学系研究科と農学研究科との連携）国際環境科学特別コース
 - ・ 佐賀大学大学院に博士課程を有する工学・農学の研究科教育プログラムである。
 - ☐ 電気電子工学専攻、機械システム工学専攻、機能物質化学専攻、都市工学専攻、生体機能システム制御工学専攻、エネルギー物質科学専攻（後期課程）、生体機能システム制御工学専攻（後期課程）、システム生産科学専攻（後期課程）の教員が参画
- 大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)：
 - ☐ 佐賀大学大学院に博士後期課程を有する研究科の教育プログラムである。国際交流協定に基づいて実施されている国際共同研究や国際共同教育を強化し、佐賀大学特有の実質的な国際活動を発展させるために、佐賀大学独自に奨学金制度（佐賀大学奨学金留学制度）を設け、アジア諸国から外国人留学生を博士後期課程に受入れるものである。工学系研究科博士後期課程の全専攻の教員が参画
- 平成 21 年度佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）（平成 13 年度より）：
 - ・ 協定校からの交換留学生の教育プログラム：電気電子工学科の教員（一部）が参画
- 高等学校ジョイントセミナー、出張講義等
- 環境美化エコ活動
 - ☐ 平成 21 年度省エネルギー活動：夏季ピーク電力の抑制策：7 月、8 月期ならびに 12 月、1 月期の空調断続運転
 - ☐ 定期的なキャンパス環境美化デーにおける一斉清掃

3. 評価領域別の集計及び分析

3.1. 教育の領域

3.1.1. 講義担当等に関する事項

表 3.1 に教員の担当科目数（学部、修士）、担当コマ数（半期当り換算）、卒業研究指導学生数、修士特別研究指導学生数、博士研究指導学生数（主指導）を表している。

表 3.1 教員 1 人当たりの講義担当、指導学生数

専 攻	職 種	学 部 (教養教育科目を含む)			大 学 院			
		担当 科目 数/ 教員	担当 コマ 数	卒研 学生 指導 数	担当 科目 数/ 教員	担当 コマ 数	修士 学生 指導 数	博士学 生指導 数
数理科学専攻	教 授	4.86	4.86	3.57	1.43	1.31	2.29	0.29
	准教授・ 講師	4.75	4.25	1.75	1.00	1.00	2.00	-
物理科学専攻	教 授	6.25	7.31	3.00	2.50	3.00	2.13	0.75
	准教授	5.14	5.93	2.14	3.00	2.90	1.43	0.00
知能情報 システム学専攻	教 授	4.75	4.37	4.67	2.33	2.17	4.00	2.17
	准教授	5.80	5.14	4.00	2.20	2.20	2.60	-
	助 教	1.33	2.41	0.33	-	-	-	-
循環物質化学専攻	教 授	8.10	8.38	3.80	2.60	2.06	3.55	1.50
	准教授	7.67	6.41	3.17	1.83	1.44	2.00	0.33
	助 教	6.00	4.40	2.00	-	-	-	-
機械システム 工学専攻	教 授 (*1)	3.67 (4.40)	3.74 (4.49)	3.33 (4.00)	2.67 (3.20)	2.04 (2.45)	5.17 (6.20)	1.17 (1.40)
	准教授・ 講師	5.17	5.46	3.67	2.17	1.42	2.67	0.08
	助 教	1.20	2.20	1.00	-	-	-	-
電気電子工学専攻	教 授	3.20	3.22	8.20	3.00	2.83	4.60	0.80
	准教授・ 講師	4.60	5.64	2.80	3.30	2.88	4.00	0.05
	助 教	3.50	6.00	0.00	-	-	-	-
都市工学専攻	教 授	4.13	4.03	4.25	1.75	1.50	3.38	1.25
	准教授・ 講師	5.30	5.28	3.80	1.90	1.63	2.00	0.40
	助 教	3.50	4.95	0.00	-	-	-	-
先端融合工学専攻 (*2)	教 授	4.70	4.88	3.60	2.30	2.15	4.80	1.80
	准教授・ 講師	5.56	6.86	3.78	1.89	1.47	3.56	0.11
	助 教	2.00	3.83	0.33	-	-	-	-

受講生数は教務システムに登録された履修者数

授業担当コマ数は、半期当りに換算する。（通年 1 コマの科目は 2 コマとする。） 1 科目を複数教員で担当する場合は、実働時間とする。

(*1)の（ ）の数値は平成 21 年度後期の途中に着任した教授 1 名を除いた値である。

(*2)の先端融合工学専攻の教授と助教には平成 22 年 2 月着任の教員を 1 名ずつ含む。

【数理科学専攻】

- 教授、准教授の平均授業担当科目数・コマ数、指導学生数は表 3.1 に示す通りである。
教授は准教授よりも多くの科目、学生の教育を担当している。准教授ながら博士後期課程の主旨指導の資格を取得し、博士学生を指導している事例が一件ある。

【物理科学専攻】

- 授業負担は、教授が平均で学部 7.3 コマ、修士 3.0 コマになっている。一方、准教授は学部 6.4 コマ、修士 3.2 コマである。どちらかという、准教授が専門性の高い授業を分担しており、教授は基礎的な科目を担当している。合計として、教授は准教授より 1 コマ程度授業負担が多くなるように分担している。
- 平均指導学生数は、教授が学部 3.0 名、修士 2.1 名の指導をしているのに対し、准教授は、学部 2.5 名、修士 2.0 名である。博士後期は教授が平均して 0.75 名を指導している。卒研究生（＝学部定員数 40 名）と修士（定員 15 名 x 2 学年＝30 名）は、年度による偏りはあるが、概ね均等に分担している。
- 物理科学科では、学生が卒業研究に着手できるまで担任制を実施しており、各教員はそれぞれの学年あたり、3～4 名の学生を担当として受け持ち、面談による学習・生活指導をおこなっている。

【知能情報システム学専攻】

- 准教授は教授よりも学部教育における多くの科目、学生の教育を担当し、博士後期課程の主旨指導の有資格者として博士学生を指導している。また、副指導教員となって、実質指導を行っている教員がいる。
- 助教は主に実験指導を担当している。指導する学生数は約 60 人で前期後期を通じて 30 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っていることが報告されている。

【循環物質化学専攻】

- 教授は学部（平均：担当科目数 8.1 科目、担当コマ数 8.4 コマ）、大学院（平均：担当科目数 2.6 科目、担当コマ数 2.1 コマ）、卒研指導学生数 平均 3.8 名、修士指導学生数 平均 3.55 名、博士指導学生数 平均 1.5 名である。
- 准教授は学部（平均：担当科目数 7.7 科目、担当コマ数 6.4 コマ）、大学院（平均：担当科目数 1.8 科目、担当コマ数 1.4 コマ）、卒研指導学生数 平均 3.2 名、修士指導学生数 平均 2.0 名、博士指導学生数 平均 0.3 名である。
- 助教は主に実験及び演習の指導を担当している。前期後期を通じて 平均 6 科目、4.4 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っていることが報告されている。
- 教授と准教授は平等に教育を担当するようにカリキュラムが組まれており、卒研配属の学生数も同じである。助教にも卒研学生が配属され、卒業研究の指導を行っている。

【機械システム工学専攻】

- 学部の講義については、平均的に准教授が教授より多く担当しているが、教授は大学院

の講義を多く担当しており、両方を合わせて考えるとほぼ同等の講義を担当している。

- 准教授 1 名は博士学生主任指導資格を取得し、10 月入学学生の主任指導を行っている。
- 助教は機械工学実験Ⅰ，機械工学実験Ⅱ，大学入門科目（創造工学入門）などで実験や演習の指導を担当している。

【電気電子工学専攻】

- 専攻の教授数が 5 名（定員は 9 名）と少なく、准教授は、教授よりも多くの科目、学生の教育を担当している。しかし、専攻全体で教授だけが博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を指導しているため、博士後期課程主旨導教員資格（⑩合）が認められていない教員が副指導教員となって、実質指導を行っている例もある。
- 平成 21 年度も、生体機能システム制御工学専攻ならびにシンクロトロン放射光センターから各 1 名助教の支援を受けながらも、電気電子工学専攻では、助教が 2 名であったので、学生実験の実施のために、准教授・講師が実験を担当しており、前期、後期いずれかに 100 名のクラス（テーマは 1 件）を担当し、さらに、後期には、「プロジェクト応用実験」と称する少人数（6～12 名）構成での長期に渡る実験を毎週担当している。
- 助教は、主に実験指導を担当しているが、専門科目を担当できる教員が退職後補充されていないため、その科目の講義を担当している。助教の実験指導する学生数は平均 100 人で前期後期を通じて、3 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を熱心に行っている。

【都市工学専攻】

- 教授は学部（平均：担当科目数 4.1 科目、担当コマ数 4.0 コマ）、卒研指導学生数 4.3 人、修士指導学生数 3.4 人、博士指導学生数 1.3 人である。
- 准教授は学部（平均：担当科目数 5.3 科目、担当コマ数 5.3 コマ）、卒研指導学生数 3.8 人、修士指導学生数 2.0 人、教授よりも多くの科目、コマ数を担当している。博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を指導している准教授がいる。
- 助教は主に実験演習の指導を担当している。担当科目数は平均 3.5 科目で前期後期を通じて平均 5 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っている。

【先端融合工学専攻】

- 教授は学部（平均：担当科目数 5.9 科目）、卒研指導学生数 4.5 名、大学院（平均：担当科目数 2.9 科目）、修士指導学生数 6.0 名、博士指導学生数 2.3 名である。但し、平均担当実績は平成 22 年 2 月着任の教員を除いた。
- 准教授は学部（平均：担当科目数 5.9 科目）、卒研指導学生数 4.0 名、大学院（平均：担当科目数 2.0 科目）、修士指導学生数 4.0 名、博士指導学生数 0.1 名である。
- 助教は主に学部の実験指導を担当している。卒研指導学生数は平均 0.5 人で前期後期を通じて 5.8 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っている。但し、平均担当実績は平成 22 年 2 月着任の教員を除いた。

3.1.2. 教育改善に関する事項

教育改善に関し、工学系研究科各専攻の教員は、次のような取り組み、実践を行っている。

【数理科学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 大学院講義においては、現代数学が進みつつある方向を示唆した講義をわかりやすく行う。（教授）
- 基礎科学である数学の論理的厳密性を重視しながら、受講生のレベルに応じた分かりやすい授業を行う。（教授）
- 入学前後に補習授業を行うなど教育支援を行う。（教授、准教授）
- 大学院生の学位取得に至る指導を積極的に行う。（教授）
- 学生が早く興味を失わない授業を行う。（教授）
- 毎回レポート問題を課し、次の週にはその解説を行った。（教授、准教授）
- 授業評価アンケート等を用いた教育評価・分析を行う。（准教授）
- ホームページを通じて講義内容についての情報提供を行う。（准教授）
- 博士後期課程では1名の院生（D1）に対して、初年度である2009年度中に最初の論文を書かせることを目標にして、セミナー指導を行う。（教授）

【物理科学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 講義初回に独自アンケートで、学生の知識範囲や本講義に望むこと等を調査し、それらの意見を参考にしながら、既に用意しておいた講義内容の中に盛り込む形で反映させていった。（准教授）
- レポート用紙として、フォーム付きのPDFファイルをウェブ上で配布し、メールで提出できるようにするなど、レポートの提出方法にICTを活用した。（准教授）
- LMSにおいて演習問題の出題だけでなく、毎週の自主学習の指示や、次回の予告などゴーイングシラバスの内容を記載した。（教授）
- 他学部の学生が対象であったので、LMSを開設し、講義資料のダウンロードを可能にし、授業連絡、ゴーイングシラバスの開示に利用した。（教授）
- シラバスに自習課題を記載している。さらに、原則として毎回演習を行い、答案を回収、採点、返却し、解答例を配布している。（准教授）
- 線形代数と力学の基本的な問題を毎週出題し、授業時間外学習を課した。（教授）
- 自習促進と、理解を確認するため、期末以外に中間テストを実施。（教授）
- e-LearningのLMSを利用し、毎週演習問題を出題し、回答状況を確認しながら、全員が回答するように指導した。（教授）
- 自作のテキストに多数の演習問題を掲載し、毎週出題することにより、授業時間外学習を課した。（教授）
- 授業の前半は、担当を決めて自作のテキストの内容を発表させた。後半はテキストから

演習問題をレポートとして出題した。(教授)

- 出席カードに、毎回質問、疑問点を書かせ、次回からの説明の改善の参考にした。(教授)
- 毎回、カードに質問などを記入して提出してもらい、次回に回答をプリントして配布することで、大人数クラスの講義でも双方向性を持つことができた。(教授)
- 予習及び復習のために、毎回、講義で用いるパワーポイント資料をウェブ上に置いて、ダウンロードできるようにした。(教授)
- 演習問題を収録した自作のテキストを公開し、学生が予習・復習をできるようにしている。(教授)
- 高校で物理を履修していない理系の学生を対象に、力学の基礎を講義した。その際、微積分などを用いて高校の物理の基本を短時間で効率的に習得できるように工夫した。(教授)
- LMS のサイトに、大学初年次程度の力学や数学の基礎的問題を出題し、自学自習の助けにした。(教授)

【知能情報システム学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 講義ノート作成(邦文や英文)と Web 公開は殆どの教員が行っている (教授、准教授、講師)
- 演習科目では、レポートのチェック、注意事項の学生への徹底を直接面談によって行っている (助教)
- 受講生に対し講義ごとの質問票やミニテストの配布とチェックを大福帳方式、Moodle(学習管理システム)によって行っている (教授、准教授)
- 講義における学生の発言を促す工夫、例えば、「新井の 10 点方式：講義開始の際に講義中の発言に 10 点を加点する旨を申し伝え、発言ごとに学籍番号を確認し、加点する」(教授)
- 再試験の受験者には、事前の自習を要求している (准教授)
- 大学院生には学外での研究発表をほぼ義務化している、発表件数は、博士前期課程学生との共著著書 1 編、学部学生と共著の論文 3 編、博士前期課程学生との共著論文 9 編、博士後期課程学生との共著論文 19 編、学部学生との共著一般発表論文 8 編、博士前期課程学生との共著一般発表論文 18 編、博士後期課程学生との共著一般発表論文 3 編であった。(教授、准教授)
- IT ツールを使った講義の実践、Moodle サイトを立ち上げて講義に有効活用している教員が 5 名いる。(教授、准教授、講師)
- 学生による授業評価を通じて得られた諸問題に対する教育法の改善を行っている。(教授、准教授、講師)

【循環物質化学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- JABEE対応カリキュラムに従いシラバスに沿った授業の実施、中間試験及び定期試験の成績評価及び結果報告、授業アンケートに基づく授業改善（教授、准教授）
- 課題の提出やマイクの使用等による学生の授業意欲向上（教授）
- 担当教員間で定期的に打ち合わせ調整を行いながら授業を実施（教授）
- 担当科目の学生評価から板書を工夫し声を明瞭にすることを努力（准教授）
- シラバスの点検及び毎回の授業毎に予習復習を指導したプリントを配布（教授）
- TAに採用した学生の意見を教育改善に役立てる（教授、准教授）
- 祝日が多く、最後に代替日で講義が重なって学生が困らないように前もって補講を行い、無理のない講義スケジュールを確保、また、理解が不十分な学生にはレポート課題を与え、それをもとに補講の実施（教授）
- 実験室指導に加えて、レポート提出時に試問等に長い時間を割いて丁寧に指導（教授）
- Power Pointによるスライドを用いて授業、理解度及び合格率ともに上昇（教授、准教授）
- 講義では学生の視点に立ち、演習を交えながらできる限り分かりやすく講義を実施（教授）
- ほぼすべての講義中に小テストと復習の実施（教授）

【機械システム工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 材料力学が機械工学とその関連分野についてどのような関わるのかを最新の設計プロセス等を解説しながら、プロジェクターで見せながら説明した。
- レポートの出題、採点による到達度の確認
- CAE を取り入れた事例を説明した。
- 各事象の説明を高校物理の場合に置き換えて説明を行った。
- 演習レポートを毎回提出させることで、学習の習熟度を上げて行った。
- クラス分けした小クラスの講義では、演習および期末試験を共通問題としている。
- 演習と一体で授業を進めることにより、講義＋演習（復習）を反復的に行っている。
- 演習と期末試験により、厳格に成績判定を行っている。
- 演習レポートにできるだけ詳細な添削を実施している。
- できるだけ基本問題から応用問題へと連続性を持たせるよう工夫している。
- 実験テーマごとに、その実験に関連した項目について検索・情報収集を行うよう課題を与えている。
- TA の活用により授業時間中に理解不足の学生に対する個別のフォローに努めている。
- 中間試験を実施し、自主学習を促進させている。
- 不定期にレポート課題を課し、自主学習を促進させている。
- Web サイトに講義ノート、演習課題の模範解答を公開し、予習復習ができるようにしている。

【電気電子工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 板書の使い方が悪かったため、今年度は板書の内容を予め清書してから授業を行うように心がけた。（教授）
- 学生による授業評価アンケートにて、予習、復習時間が平均より短かったことから、毎回講義の終了前に理解度確認問題を課し、復習を促すようにした。（准教授）
- 昨年度の授業評価結果にて予習、復習時間が平均以下であったことから、今年度は講義終了前に課題を与え、講義時間内に回答が終わらない場合は次回講義前までに回答を提出することとすることで、自宅での予習、復習を促した。（准教授）
- 講義の最後の 15 分を割いて、演習をすることによって、前回の復習させた。（教授）
- 前年度の定期試験、再試験の解答例を公開した。講義中の演習問題を一層丁寧に説明した。（教授）
- 多数の再履修者を抱えて講義進行が難しかったが、解答例の呈示などを行い、単位取得率を前年度から大幅に上げることができた。（教授）
- 同一学科所属教員による相互チェックの観点から、授業参観を受け入れた。（教授、准教授、助教）
- 研究室で開発してきた Web ブラウザを用いた対面型授業支援システムを用いて、講義で説明できなかったことや受講者からの匿名の質問について回答した。（教授）

【都市工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 受講生に対し講義ごとの質問票やミニテストの配布とチェックしている。（教授、准教授）
- 再試験の受験者には、事前の自習を要求している。（教授、准教授）
- 授業アンケート結果を踏まえ次年度に向けた改善点をシラバスに明記し、周知徹底を図った。（教授、准教授）
- 質問用紙を提出させ、追加説明が望ましい内容については次回の講義はじめにおいて逐次説明を行った。（准教授）
- 14 回分の出席カードを作成し、質問等を記述させた。（准教授）
- 宿題や演習問題の模範解答を答案返却時に板書あるいは配布し復習の徹底を図った。（教授、准教授）
- 講義における学生の発言を促す工夫をした。（教授）
- 実務で用いられている解析ソフトを使った講義への実践例の導入。（准教授）
- 演習科目では、レポートのチェック、添削、注意事項の学生へ徹底した。（教授、准教授、助教）
- 講義ノートを作成（邦文や英文）と Web 公開している。（准教授）
- Web を通した演習問題や実験演習資料の配信。（准教授）
- 技術士 1 次試験や建築士試験の問題を演習に活用。。（教授、准教授）

【先端融合工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- シラバスを作成しそれを公開した（教授、准教授、助教）

- 教育に関する FD・SD 研修会等に積極的に参加し、教育の質を向上（教授、准教授）
- 昨年度の授業評価アンケートをもとに、授業ごとにレポート課題を与え、復習時間を確保（教授）
- 学生に対し、答案添削手法の改善を実施（教授）
- 学生個々に板書を PDF にして配布（教授）
- 講義資料には式の変形過程まで詳細に記述（教授）
- 時間の関係で講義中には説明できないことまで講義資料に記述（教授）
- 研究室のゼミの記録を Wiki ベースに変更し、学生がいつでもどこでも実験結果や論文をアップロードできるようにした（教授）
- 不合格者に対して面談を行ない、理解できていない点を指摘し、定期試験解答例を配布（准教授）
- 講義で使用する資料を適時改良し、理解しやすくなるように心掛けた（助教）

3.1.3. 教育研修・FDに関する事項

教育研修・FD について、工学系研究科各専攻の教員は次の活動を行っている。

【数理科学専攻】

専攻・学科内での FD 活動の他、

- 理工学部 FD 報告会（教授）
- JABEE シンポジウム（教授）

への参加が報告されていた。

【物理科学専攻】

専攻・学科内での FD 活動の他、

- 理工学部 FD 講演会に参加（教授、准教授；講演 2、聴講 6）
- 佐賀大学 FD・SD フォーラム参加（教授）
- 公開授業参加（教授）
- 高等教育開発センターFD・SD フォーラム企画・参加（教授）
- 教養教育運営機構 FD 講演会主催（教授）
- アドミッションセンターFD 講演会（教授）

が報告された。

【知能情報システム学専攻】

専攻・学科内での FD 活動の他、

- ティーチング・ポートフォリオを本学で初めて作成し、学科においてもティーチング・ポートフォリオ作成に関する報告を行った。（准教授）
- 教育に関する FD 報告として、文部科学省、中央教育審議会、JABEE、Seoul 協定等の最近の取り組みを調査し、「国際的相互承認の枠組みと JABEE の対応」と題して学科内で報告した。（教授、准教授）

- FD 報告として分野別質保証の検討状況を紹介した。(教授)
等が報告された。

【循環物質化学専攻】

専攻・学科のFD活動として次のような記載がある。

- 学科に教育プログラム委員会を設置し、授業改善について議論した。(教授、准教授)
- 学科で、JABEE に関する講演会を1回開催した。(教授、准教授)
- 基礎科目の補習ができるように演習問題とヒント、解答を載せた e-Learning システムを構築した。(教授、准教授)

専攻・学科内でのFD活動の他、

- 理工学部工学研究科FD講演会
- 理工学部・工学系研究科FD講演会
- 佐賀大学FD・SDフォーラム
- JABEE 審査委員
- 公開授業
- 情報リテラシ・情報セキュリティ講習会

への参加が報告されていた。

【機械システム工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、

- 専攻・学科内に設置した教務グループによるJABEE推進対応、学部および大学院の教務関連事項の検討
- 学部FD講演会への参加

【電気電子工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、

- LMS 並びに E-learning の活用法(教授、准教授)
- 平成21年度理工学部・工学系研究科FD講演会(教授、准教授)
- 平成21年度佐賀大学FD・SDフォーラム「ティーチング・ポートとは何か」、「ICTの効果」(教授、准教授、講師、助教)
- アドミッションセンターFD(高等学校と大学との連携を図ることを目的としたジョイントセミナー)での、佐賀大学に関する教員各位の入試情報等の共有についての講演を受講した。)(教授、准教授、講師)

の参加が報告されていた。

【都市工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、学内FD講演会への参加、公開授業への参加などが報告されていた。

【先端融合工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他

- FD講演会への参加(教授、准教授)

- E-learning の活用法の聴講（教授）
- 佐賀大学 FD・SD フォーラムへの参加（教授、准教授）
- アドミッションセンターFDへの参加（教授）

が報告されていた。

3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項

オフィスアワーの設置状況と学生相談の内容について、工学系研究科各専攻の教員は次の活動を行っている。

【数理科学専攻】

- 相談内容は学業や就職に関するものが多い。（教授、准教授）

【物理科学専攻】

- 学科では卒業研究着手までの担任制実施しており、各教員は学年毎に3ないし4名の学生の担任の役割を果たしている。年度初めに学習・生活相談の面談を実施している。（教授、准教授）
- 特に修学上の遅れがみえる学生については、教室会議で取り上げ情報交換し、可能な限りの対策を行っている。（教授、准教授）
- 大学院生については、指導教員が担任の役割を果たしている。（教授、准教授）

【知能情報システム学専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。
- 相談内容は就職や修学に関するものが多い。（教授、准教授）

【循環物質化専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。相談内容については記載欄がないので不明である。

【機械システム工学専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。相談内容の半数以上が学修相談，以下，進路相談，生活相談の順となっている。

【電気電子工学専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、Web ページで曜日時間を公開し、全教員が行っている。
- 相談内容は勉学や就職に関するものが多い。（教授、准教授）
- 教員によっては、のべ回数 200 回を超している。（教授、准教授）

【都市工学専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。相談内容は宿題の解き方、講義内容に関する質問、最終試験の範囲などに関するものが多い。
- 年2回の個人面談を行っており、履修履歴と履修計画について相談に応じている。一部の修学上の問題などは随時相談に応じ、関係教員は情報の共有化を行っている。進級要件等の学生への周知徹底を図ってはいるが、学生自身の単位修得状況の把握と進級要件

等との照査不徹底に起因した問題が生じたことは残念である。学生の自立を促す対応方針に基づきチューター教員は学生に対応しているが、踏み込んだ指導の可否を再考する必要がある。

【先端融合工学専攻】

オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。また、全教員が電子メールでの対応も含め、オフィスアワー時間以外にも対応している。

3.1.5. 学生の受賞等

【機械システム工学専攻】

- 日本冷凍空調学会会長賞

【電気電子工学専攻】

- 電子情報通信学会九州支部平成 21 年度学生会講演奨励賞（指導教員：准教授）
- 電子情報通信学会九州支部平成 21 年度学術奨励賞（大学院）（指導教員：教授）
- 電気学会九州支部 平成 21 年度論文発表賞 B 賞（指導教員：講師）
- IEEE 福岡支部 2009 年学生研究奨励賞（指導教員：講師）

【都市工学専攻】

- 土木学会平成 21 年度全国大会第 64 回年次学術講演会優秀講演賞 2 名
（指導教員：教授，教授）
- 平成 21 年度土木学会西部支部研究発表会優秀講演賞 2 名
（指導教員：教授）
- 2009 年度日本コンクリート工学協会九州支部長賞 2 名
（指導教員：教授、准教授）
- 2009 年度日本建築学会九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：教授）
- 都市住宅学会九州支部 2009 年度優秀学生賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 2009 年度日本都市計画学会九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 2009 年度空気調和・衛生工学会九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 2009 年度支部共通事業・日本建築学会設計競技 九州支部入選 2 作品（2 グループ）
（指導教員：准教授）
- 2009 年度「すまレピ」卒業作品自慢コンテスト最優秀賞 1 名
（指導教員：教授）

3.2. 研究の領域

3.2.1. 著書、論文等の発表実績

過去5年間（H17.4.1～H22.3.31）の発著書、論文等の発表実績を表3.2に示す。

表3.2 過去5年間（H17.4.1～H22.3.31）の発著書、論文等の発表実績の平均値

専 攻	職 種	著 書	論文総数		和文原著		英文原著	
				査読付		査読付		査読付
数理学専攻	教 授	0.00	9.29	9.14	0.14	0.00	9.14	9.14
	准教授	0.00	2.75	2.75	0.00	0.00	2.75	2.75
物理学専攻	教 授	0.00	15.38	11.63	2.63	0.14	14.14	11.50
	准教授	0.00	10.00	9.57	0.14	0.00	9.86	9.57
知能情報 システム学専 攻	教 授	1.33	22.17	16.83	9.17	6.83	13.00	10.00
	准教授	1.20	21.20	11.80	11.40	3.40	8.40	8.40
	助 教	0.00	0.67	0.67	0.17	0.17	0.50	0.50
循環物質化学 専攻	教 授	0.90	16.60	16.30	0.40	0.20	16.20	16.10
	准教授	0.17	21.33	19.17	3.33	2.67	18.00	16.50
	助 教	0.00	4.33	4.33	0.33	0.33	4.00	4.00
機械システム 工学専攻	教 授	0.83	26.17	19.50	6.17	2.33	19.17	17.17
	准教授 (講師含)	1.58	34.83	33.50	3.17	3.17	31.67	30.33
	助 教	0.00	9.80	7.20	4.40	2.80	5.48	4.40
電気電子工学 専攻	教 授	0.80	25.20	23.20	2.40	2.40	22.80	20.80
	准教授 (講師含)	1.20	15.50	14.80	2.90	2.30	12.50	12.40
	助 教	0.50	8.00	8.00	3.50	3.50	4.50	4.50
都市工学専攻	教 授	0.63	20.75	16.00	7.75	5.25	13.00	10.75
	准教授 (講師含)	0.90	14.00	5.20	9.60	3.30	4.40	1.90
	助 教	0.00	18.00	10.50	14.25	6.75	3.75	3.75
先端融合工学 専攻	教 授	0.70	40.10	28.70	6.80	2.60	33.70	26.10
	准教授 (講師含)	1.11	22.89	18.67	7.33	3.56	19.56	19.11
	助 教	0.00	5.67	6.00	2.33	2.33	3.33	3.67

【数理学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は非常に活発である。理由の一つとして、二人の教授の論文数が際だっ
て多いために教授全体の論文数の平均値をかさ上げしていることにも起因している。ま
た教授全員が国内外の一流学術雑誌に論文を掲載している。
- 准教授の研究活動は論文の質において教授と遜色のない研究を着実にやっている。

【物理科学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

分野間や研究形態の違いにより、発表論文数にはばらつきがあるが、いずれの場合も

- 教授の研究活動は概ね良好におこなわれていることが窺い知れる。
- 准教授の研究活動は概ね良好な研究活動が行われていることが窺い知れる。

【知能情報システム学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動はアクティビティが高い。しかし、著書は 2 名の教員に偏っており、論文も教員による偏りが顕著である。
- 准教授の研究活動もアクティビティが高い。しかし、著書は 2 名の教員に偏っており、論文も教員による偏りが顕著である。査読付き論文数が若干少ない。
- 助教の研究活動はアクティビティが低い。

【循環物質化学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は非常に良好であり、5 年間に一人平均 16.6 編の査読付き論文を報告している。
- 准教授の研究活動は非常に良好であり、5 年間に一人平均 19.2 編の査読付き論文を報告している。
- 助教の研究活動は良好であり、5 年間に一人平均 4.3 編の査読付き論文を報告している。

【機械システム工学専攻】本表より、教授、准教授・講師、助教ともに概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。

【電気電子工学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は、非常に優れていると言える。
- 准教授および講師の研究活動は、2 名の教員が過去 5 年間で論文全く書いていないことは、大変遺憾であるが、両名を除いて、優れていると思われる。
- 助教の研究活動は、良好である。

【都市工学専攻】本表において、原著論文数のばらつきが大きい。研究分野の特徴もあろうかと思われるが専攻全体としては、一層の研究活動が望まれる。英文の原著論文数は増加しているが、査読付き原著論文については、より一層の積極的活動が望まれる。

【先端融合工学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授は 5 年間で平均 28.7 件の査読付き論文を発表している。
- 准教授は 5 年間で平均 18.7 件の査読付き論文を発表している。
- 助教は 5 年間で平均 6.0 件の査読付き論文を発表している。

3.2.2. 共同研究などに関する活動実績

【数理科学専攻】

- 名古屋工業大学大学教授との共同研究（教授）
- 中国科学院教授、清華大学教授等との国際共同研究（教授）
- 日本学術振興会の外国人特別研究員の受け入れ（継続）（教授）
- 韓国、フィンランドの研究者との国際共同研究（教授）

- ドイツ・ボン大学教授との国際共同研究（教授）

【物理学専攻】

- 高エネルギー加速器研究機構との共同研究（教授）
- リニアコライダー用測定器開発研究：東北大、KEK、東大、信州大他との共同研究（教授）
（外部資金 5,150 千円）
- 新型測定器開発プロジェクト：東工大、KEK、京大との共同研究（教授）（外部資金 6,700 千円）
- 稀崩壊現象研究プロジェクト：阪大、KEK、山形大他との共同研究（教授）（外部資金 1,300 1,000 千円）
- 金属絶縁体研究（准教授）（外部資金 1,000 千円）

【知能情報システム学専攻】

- 九州大学、九州工業大学、鹿児島大学との超小型人工衛星の研究開発に係る共同研究（教授）
- 佐賀県先端 IT 技術事業組合との視線入力による障害者会話支援研究プロジェクト（教授）
- 海洋エネルギー研究センター併任業務としての海洋環境衛星リモートセンシングに関する研究（教授）

【循環物質化学専攻】

- 学内研究プロジェクト「資源循環システムの開発」に参加（教授、准教授）
 - 他大学との共同研究（教授、准教授）
 - 民間企業との共同研究（教授、准教授）
 - 環境省と文部科学省の外部資金を獲得（教授、准教授）
- その他、委任経理金、科学研究費補助金に関する報告多数。

【機械システム工学専攻】

- 水素雰囲気における高沸点ガスの露点測定
- 熱可逆性ゲル状潤滑剤のトライボロジック的性質と応用展開の可能性
- 企業在職者向けの自動車産業人材育成プログラムの研究会開発・実践
- 多軸精密制御による次世代型プレス機及び金型の研究開発
- 繰返し弾塑性・擬弾性変形により形成した変形双晶の制御によるマグネシウム合金の結晶粒微細化と高強度化
- CO₂系新規混合冷媒を用いた冷凍サイクルの評価に関する基礎研究
- CO₂冷媒を使用した冷凍・冷蔵の基礎研究

【電気電子工学専攻】

- 民間企業との共同研究で特許出願（教授）

【都市工学専攻】

- 共同研究「佐賀平野の流域治水に関する調査」（教授、准教授、助教）
- 受託研究「有明海沿岸道路における盛土および基礎技術に関する研究」（教授）
- 受託研究「佐賀のまちなか居住におけるヴォリュームシミュレーションに関する研究」（准

教授, 助教)

【先端融合工学専攻】

- 永久磁石式モータの損失解析手法に関する研究 (教授)
- 日常生活動作に基づく人工関節運動シミュレータの開発 (教授)
- 統計解析を用いた加圧流動床ボイラの新炭種選定手法に関する研究(フェーズⅡ) (教授)
- 高圧水素ガスの臨界ノズル流れにおける実在気体効果に関する研究 (教授)
- ロバスト適応制御の産業応用に関する研究 (准教授)
- 有機光機能材料の創製とその応用に関する研究 (准教授)

3.2.3. 受賞等の実績

【知能情報システム学専攻】

- 電子情報通信学会 通信ソサエティ インターネットアーキテクチャ研究会「インターネットアーキテクチャ研究賞」 (教授)
- 可視化情報学会第 37 回可視化情報シンポジウム ベストプレゼンテーション賞 (教授)
- Keynote Speech Award in Blended Learning Seminar and Workshop on Blended Learning, Institute Technology Bandung, Indonesia, Dec. 15-17 2009 (教授)
- Keynote Speech Award in Open Source Software for Higher Education, Seberes Marat University, Indonesia, March 15 2010 (教授)

【循環物質化学専攻】

- 高分子学会奨励賞、バイオレオロジー学会奨励賞受賞 (助教)

【機械システム工学専攻】

- Poster Awards, The 3rd Asian Symposium on Magnesium Alloys

【電気電子工学専攻】

- JAMS-CS (新機能化合物半導体懇談会) より JAMS-CS AWARD を受賞 (教授、准教授)

【先端融合工学専攻】

- 日本機械学会より 船井賞 (教授)

3.3. 国際・社会貢献の領域

3.3.1. 国際交流実績

【数理科学専攻】

- 理工学部国際パートナーシップ講師（教授）
- 福岡および佐賀大学でそれぞれ国際研究集会を実施（教授）
- KAIST（韓国）やハノイ数学研究所（ベトナム）での講演（教授）

【物理科学専攻】

- 理工学部国際パートナーシップ講師（教授、准教授）
- 海外からの研究者の受け入れ（教授、准教授）
- 留学生の受け入れ（教授）

【知能情報システム学専攻】

- JICA 研修「インドネシア遠隔教育コンテンツ開発コース」コースリーダー（教授）、講師（准教授、講師、助教）
- 求めに応じ、在インドネシア大学に招待され、キーノートスピーチを果たした。（教授）

【循環物質化学専攻】

- 理工学部国際パートナーシップ講師（教授）
- 海外研究者の受け入れ（教授、准教授）

【機械システム工学専攻】

- 国際パートナーシップ講師
- 国際学会の Committee
- 国際会議開会の運営委員，実行委員など
- 海外からの研究者の受け入れ
- 留学生の受け入れ
- 国際会議における発表等
- 外国語によるHPの開設

【電気電子工学専攻】

- 外国語によるホームページの開設として研究業績リスト及び研究概要の一部の公開（准教授）
- 外国語による研究グループのホームページの開設し、経歴、研究業績など紹介した（准教授）

【都市工学専攻】

- 理工学部国際パートナーシップ講師の派遣と受け入れ（教授）
- 国際研究プロジェクト（中国）への参加（教授）
- 学位審査員（タイ）の受け入れ（教授）
- 学術交流などによる共同研究者の受け入れ（教授）
- 客員研究員（インドネシア）の受け入れ（准教授）

- 海外からの研究者・院生の受け入れ（教授）
- 国際ワークショップの開催ホスト（教授、准教授、助教）

【先端融合工学専攻】

- 理工学部国際パートナーシップ講師（教授）

3.3.2. 社会貢献実績

【数理科学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文誌編集委員（教授）
- 日本数学会幾何学分科会代表幹事（教授）
- 佐賀県高校教員との交流会世話人（教授、准教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授）
- 微分幾何学シンポジウム開催の世話人（教授、准教授）

【物理科学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 文科省学術領域研究専門委員（教授）
- 学会領域委員（教授）
- 佐賀県主催の協議会等の委員（教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授）（佐賀北、筑紫台、長崎佐世保南、三養基高校）
- SSH 理系ガイダンス（教授）（致遠館高校）
- 佐賀県高等学校校長連絡会での講演（教授）
- 佐賀県高等学校理科実習教諭等研修会講師（教授）
- 高エネルギー加速器研究機構放射線安全審議委員会委員（教授）
- 佐賀県スーパーサイエンスハイスクール運営指導運営委員会（教授）
- 学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員（准教授）
- 九州大学大学院アドバイザーコミッティー委員（准教授）
- 市民向け講演会 企画・実施（教授）
- 社会人（卒業生：後期課程を単位取得の上退学）の学位論文指導（准教授）

【知能情報システム学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文誌編集委員（教授、准教授）
- 学会研究会幹事（教授）
- 佐賀県主催の協議会等の幹事、運営委員など（教授、准教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授）
- 学会開催の実行委員、運営委員など（准教授）

【循環物質化学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）

- 学会論文誌編集委員（教授、准教授）
- 学会研究会幹事（教授）
- ジョイントセミナー講師（教授、准教授）
- 学会開催の実行委員、運営委員など（准教授）
- 高校生ものづくりコンテスト九州大会講師（教授）
- 佐賀県理科・化学教育研究発表会実行委員・講師（教授、准教授）
- 化学への招待実行委員・講師（教授、准教授）

【機械システム工学専攻】

- 学会理事
- 学会常務理事
- 学会評議員
- 学会校閲委員，編集委員，運営委員
- 学会九州支部理事，評議員，商議員，常議員など
- 研究会会長，幹事など
- 学会開催の実行委員，運営委員など
- ジョイントセミナー
- スーパーサイエンスハイスクールの講師

【電気電子工学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文誌編集委員（教授、准教授）
- 国内開催の国際学会委員会事務局補佐（准教授）
- 学会技術専門委員会委員（准教授）
- 学会技術調査専門委員会幹事（教授）
- 米国 IEEE CIS 日本支部 運営委員（准教授）
- ジョイントセミナー講師担当（教授、准教授）
- 佐賀県立高等学校 SSH 事業参加（教授）

【都市工学専攻】

- 学協会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文集編集委員（教授、准教授）
- 学会幹事・評議員・商議員（教授、准教授）
- 協会理事・商議員（教授）
- 協会主催の CPDS 講習会・研修会の講師など（教授、准教授）
- 佐賀県、佐賀大学主催の講習会・研修会の講師（教授、准教授、助教）
- ジョイントセミナー（教授、准教授、助教）
- 学会・シンポジウム開催の実行委員、運営委員など（教授、准教授、助教）
- 市民向け講演会などの講師担当（教授、准教授、助教）
- 国、県、市町村の各種委員会・審議会の委員（教授、准教授、助教）

【先端融合工学専攻】

- 学会論文査読委員（教授，准教授）
- 学会の役員，運営委員，幹事など（教授，准教授）
- 佐賀県主催の協議会等の幹事，運営委員など（教授）
- 佐賀県の審議会の審議員（教授）
- ものづくり講座講師（教授，准教授）
- ジョイントセミナー（教授，准教授）
- 学会開催の実行委員，運営委員など（准教授）
- 研究指導，技術指導など（教授）

3.4. 組織運営の領域

【数理科学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）

【物理科学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（教授、准教授）
- 教育研究評議会評議員（教授）
- 教養教育運営機構機構長（教授）
- 高等教育開発センター・副センター長、運営委員、協力教員、併任教員（教授）
- 大学評価委員（教授）
- 附属図書館運営委員（教授）
- 総合情報基盤センター運営委員（教授）
- 入試システム専門委員（教授）
- 研究科長補佐（教授）
- 物理科学科学科長・物理科学専攻主任（教授）
- 理工学部・工学系研究科各種委員の担当（教授、准教授）
- 学科内各種委員の担当（教授、准教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授）

【知能情報システム学専攻】

- 理工学部各種委員の担当および全学委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授、助教）
- 理工学部長としての組織運営(教授)
- 教育担当理事補佐としてのポートフォリオ関連業務の推進(准教授)

【循環物質化学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（准教授、助教）
- 高等教育開発センターセンター長（教授）
- 教育研究評議会評議員（教授）
- 留学生センターセンター長（教授）
- 総合分析実験センター副センター長（教授）
- 大学教育委員会・FD 専門委員会委員長（教授）
- 連携大学院運営委員会委員長（教授）

【機械システム工学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）
- 美化デーなどの活動に積極的に参加（全教員）

【電気電子工学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）
- 全学委員を担当（教授、准教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

【都市工学専攻】

- 工学系研究科・理工学部各種委員の担当（全教員）
- 法人本部と工学系研究科・理工学部の運営補佐（3名の教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（准教授、助教）

【先端融合工学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度

教員の総合的活動状況として、教員個人から自己点検された評価の各領域における評価点ならびに達成度の最小値と最大値をそれぞれの学科の教授、准教授、講師、助教について整理したものが下記の表 4.1 である。

表 4.1 教員自身による自己点検評価（評価点ならびに達成率）

専 攻	職 種	教育の領域		研究の領域		国際貢献・社会 貢献の領域		組織運営の領域		総合 評価
		評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	
数理科学専攻	教 授	3-5	70-95	3-5	70-100	3-5	70-95	3-5	70-95	3-5
	准教授	4-5	80-100	2-5	30-90	1-5	10-90	4-5	85-100	2-4
物理科学専攻	教 授	3-4	70-80	2-4	55-90	3-4	60-100	3-4	60-90	2-4
	准教授	1-4	10-90	1-4	0-90	1-4	0-80	1-3	0-90	3-4
知能情報 システム学専攻	教 授	3-5	80-100	4-5	75-100	3-5	70-100	4-5	100-100	4-5
	准教授	4-5	80-100	4-5	80-100	3-5	60-100	4-5	80-100	4-5
	助 教									
循環物質化学専攻	教 授	3-4	50-100	2-4	60-100	2-5	60-100	3-5	50-100	3-4
	准教授	3-4	70-95	3-5	70-100	2-4	0-90	2-5	30-100	3-4
	助 教									
機械システム 工学専攻	教 授	3-5	60-100	3-5	60-100	3-5	60-100	3-4	60-100	3-4
	准教授	4-5	80-90	3-5	70-95	3-5	60-90	3-4	70-90	3-4
	講師含 助 教									
電気電子工学専攻	教 授	3-5	70-100	4-5	80-100	3-5	70-100	3-5	70-100	3-5
	准教授	2-5	40-100	2-5	30-95	2-5	35-100	2-4	50-90	2-4
	講師含 助 教									
都市工学専攻	教 授	3-5	70-90	3-5	60-100	2-5	40-90	3-5	70-90	3-4
	准教授	3-5	70-100	2-5	30-100	3-5	50-100	3-4	70-100	2-5
	講師含 助 教									
先端融合工学専攻	教 授	2-5	40-100	2-5	30-100	2-5	40-100	2-5	30-100	2-4
	准教授	3-5	70-95	3-5	80-90	2-5	40-90	3-4	50-90	3-4
	講師含 助 教									

表中、例えば、(3-4)は評価点、達成率の（最小数 3－最大数 4）を表す。

一部の専攻において助教の人数が少ないため、助教のデータは割愛した。

【数理科学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

【物理科学専攻】

この表から、各教員は的確な自己評価を行っていると思われる。（病気療養中の教員を除く）

【知能情報システム学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

【循環物質化学専攻】

この表から、各教員は積極的な自己評価を行っていると思われる。

【機械システム工学専攻】

この表から、ほとんどの教員においてはそれぞれの職分を考慮した適格な自己評価を行っていると思われるが、一部の教員については本学および本学部目標達成に向けた活動という観点から判断して自己総合評価が若干低いように思われる。

【電気電子工学専攻】

この表から、2名の教員が厳しい自己評価をしているが、各教員は、概ね妥当な自己評価を行っていると思われる。

【都市工学専攻】

この表から、職種毎の相互評価点の平均は 3.5 から 3.6 であり大差は無く、概ね良好から優れているの中間あたりにある。各教員は概ね妥当な自己評価を行っていると思われる。

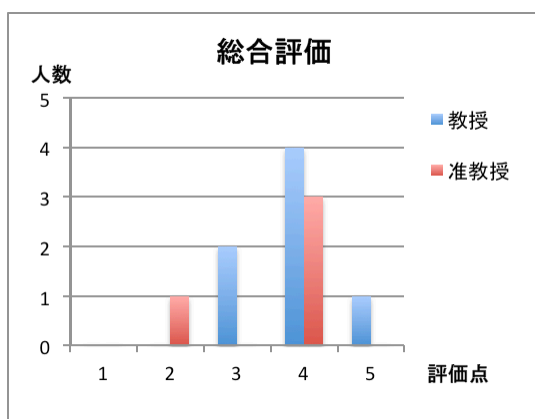
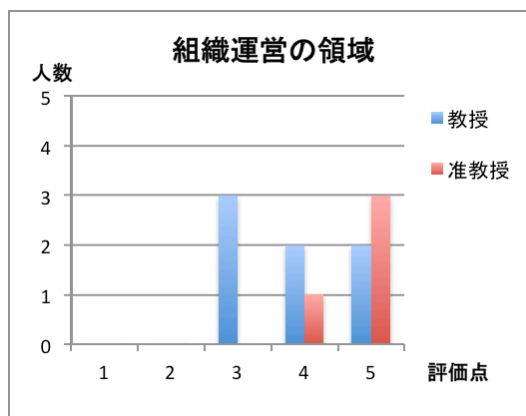
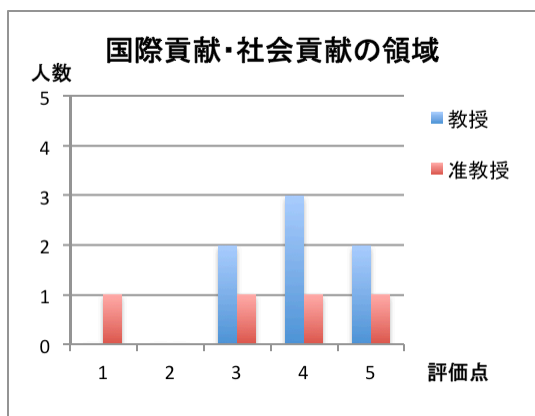
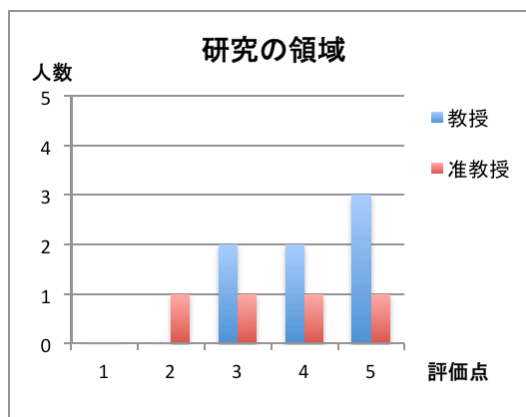
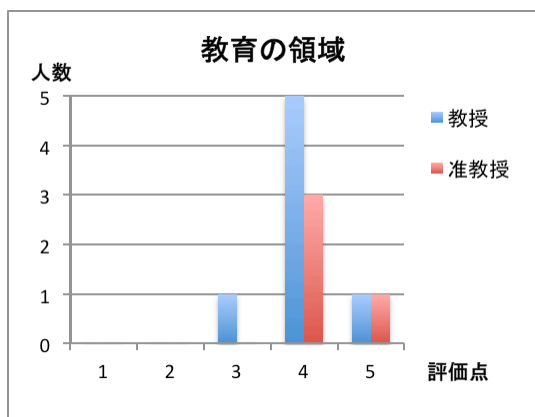
【先端融合工学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

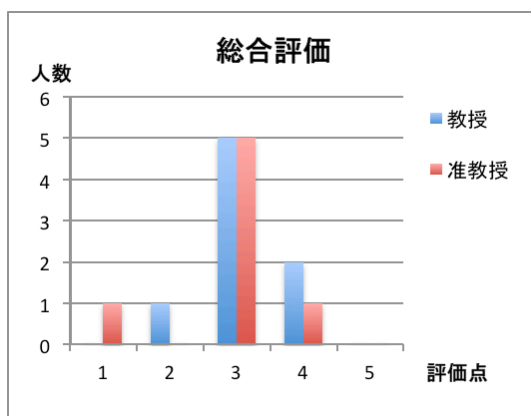
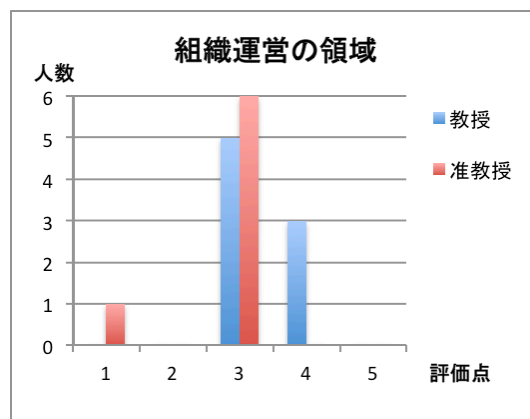
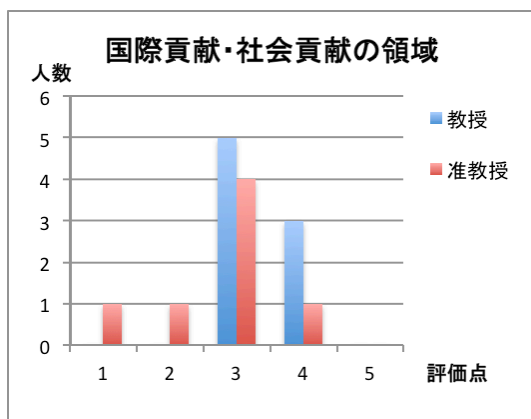
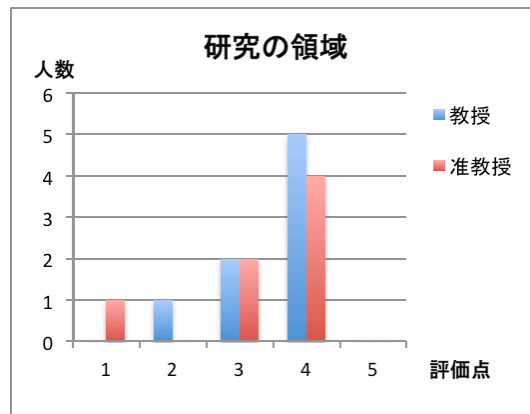
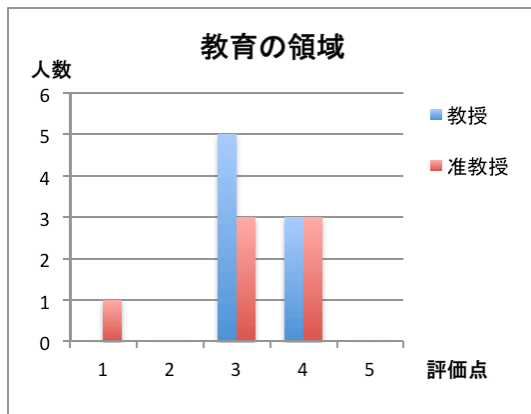
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム

次ページから、学科毎に各教員が自己点検した評価領域に関する評価点のヒストグラムを示す。一部の専攻で助教の任数が少ないため、助教の評価点は掲載していない。

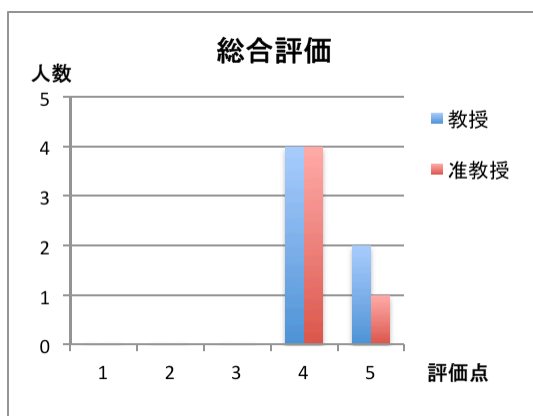
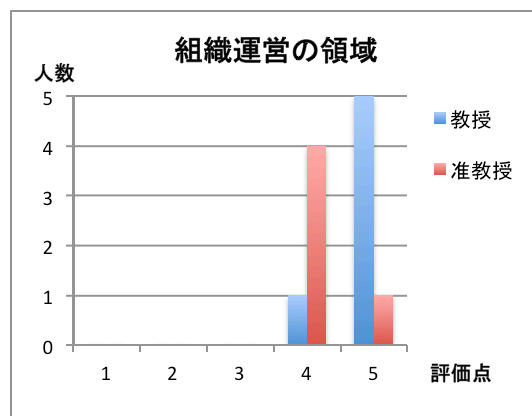
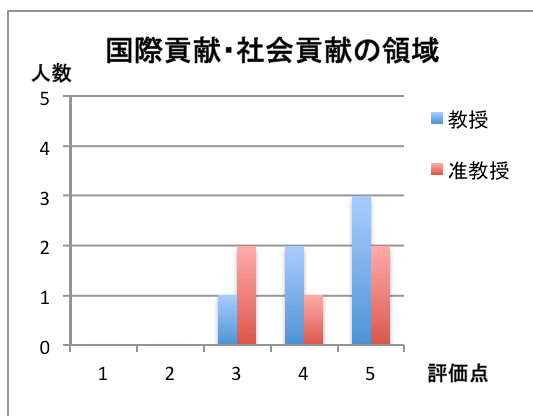
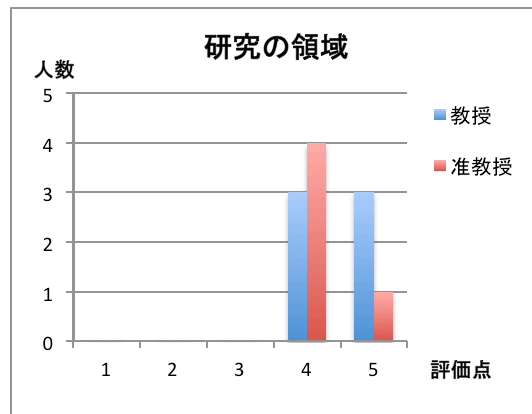
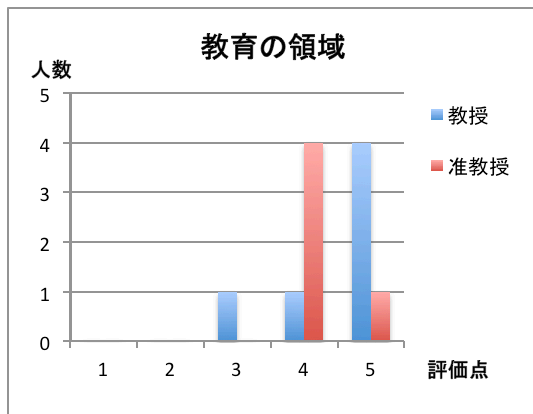
【数理科学専攻】



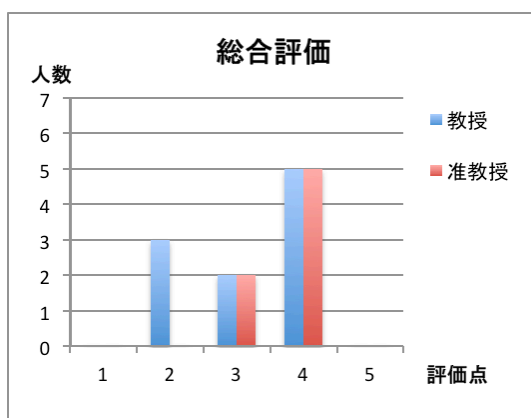
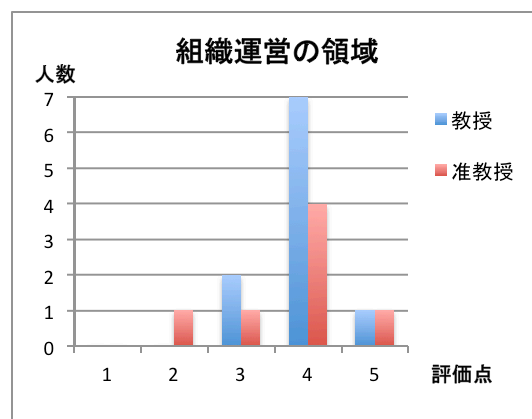
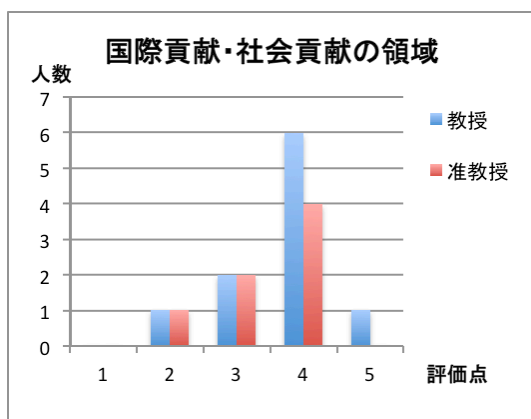
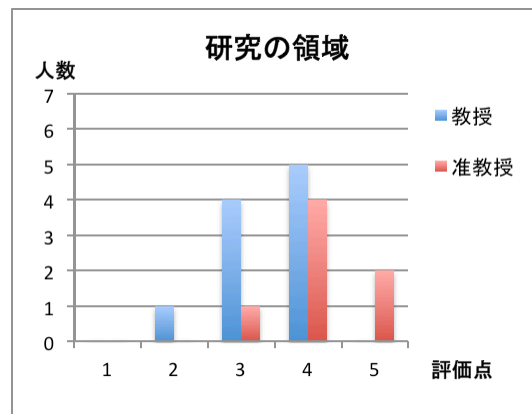
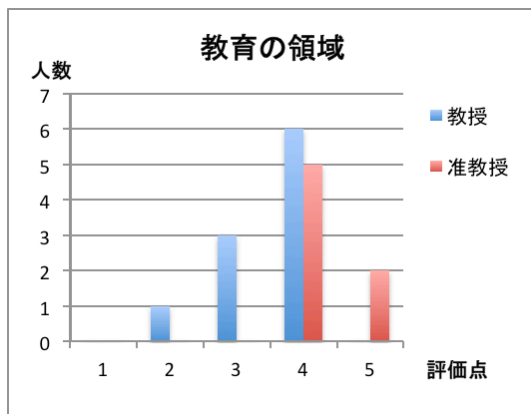
【物理科学専攻】



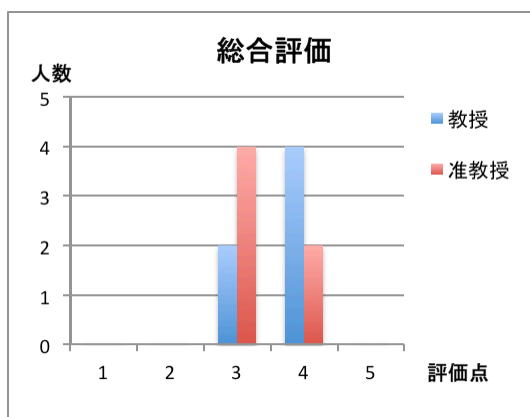
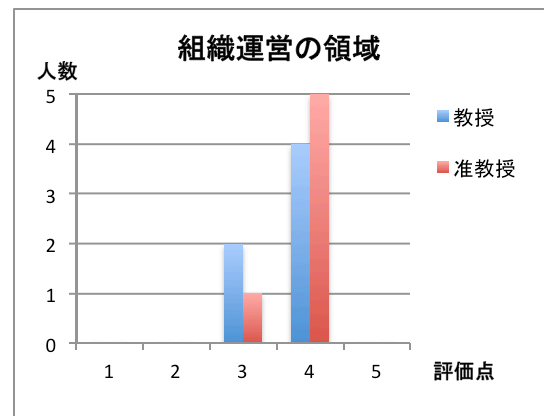
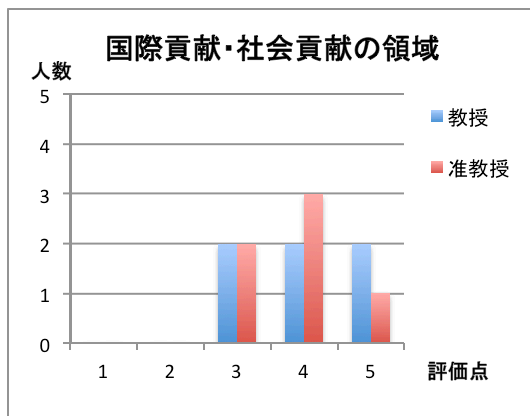
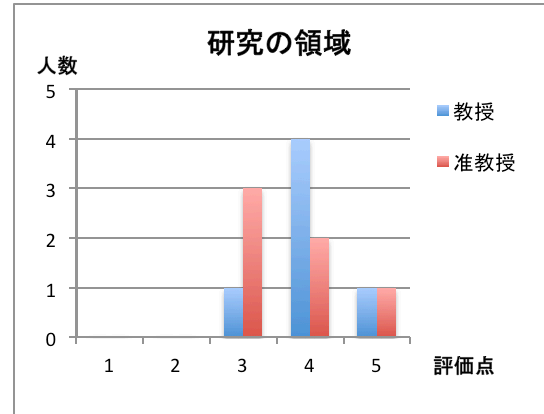
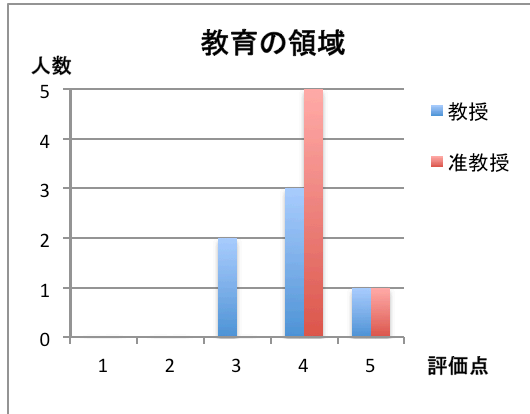
【知能情報システム学専攻】



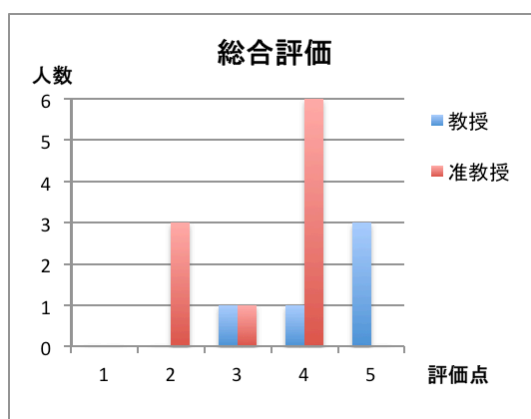
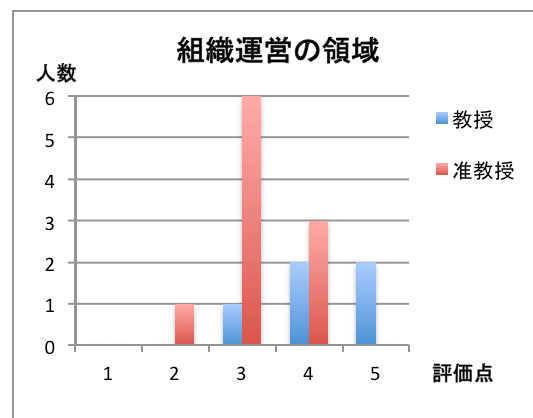
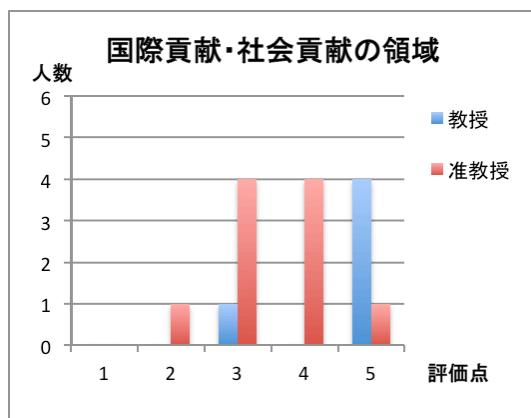
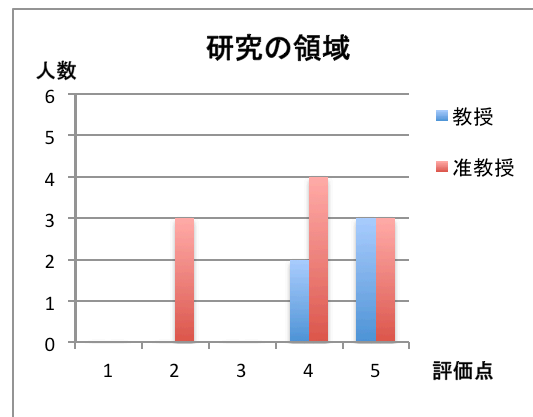
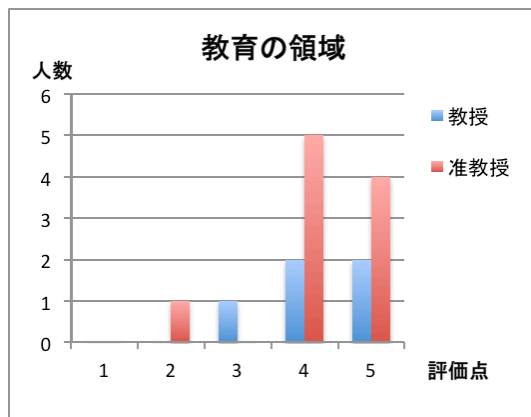
【循環物質化学専攻】



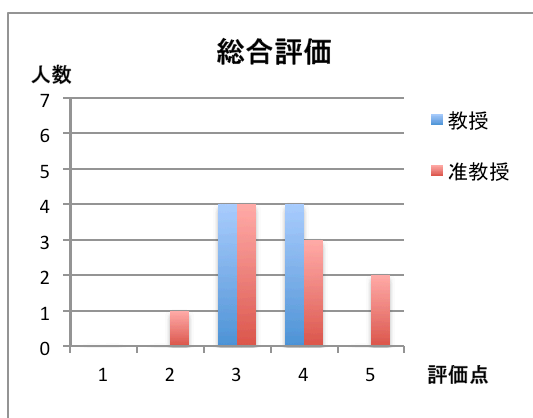
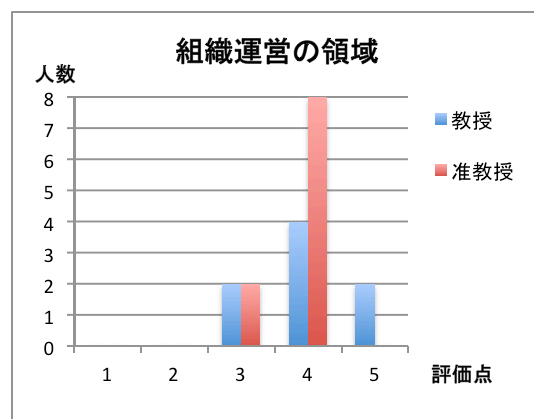
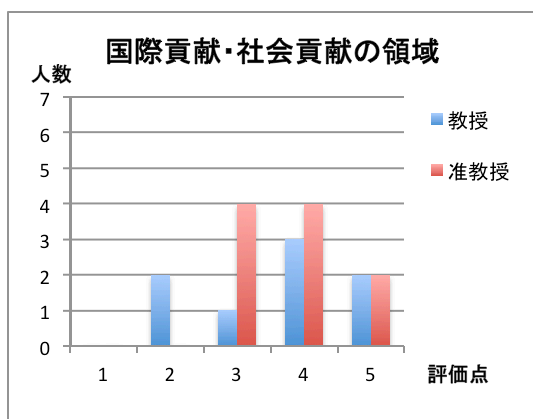
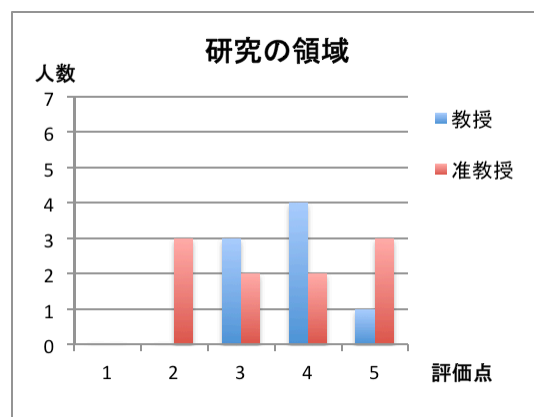
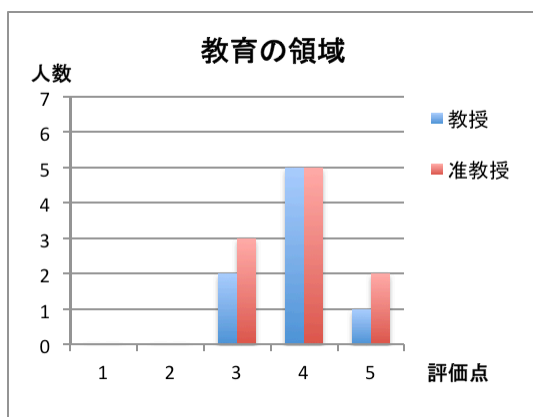
【機械システム工学専攻】



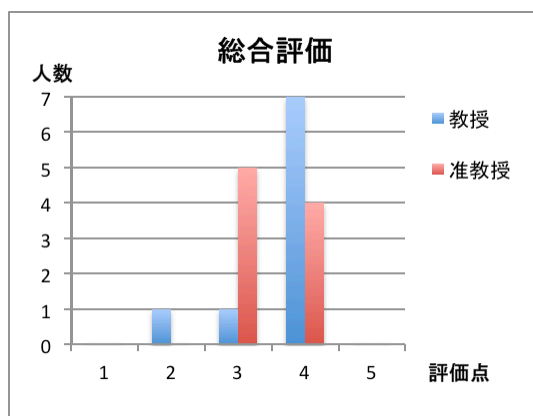
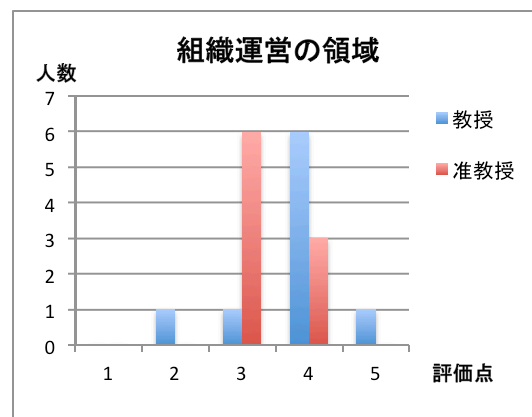
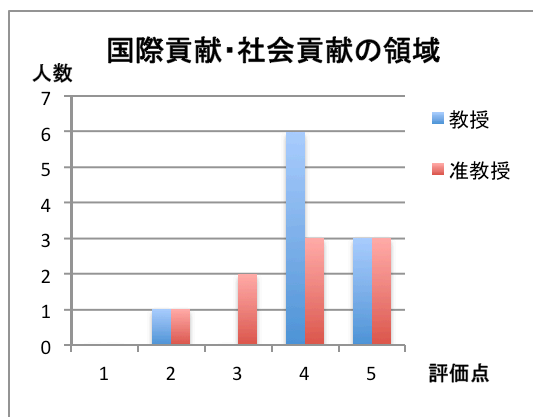
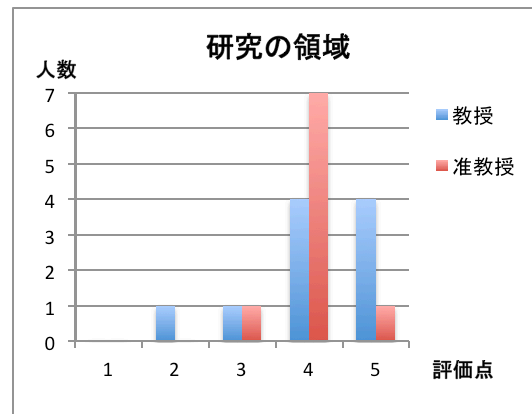
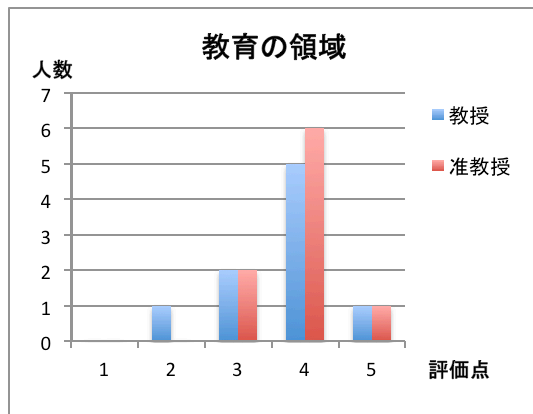
【電気電子工学専攻】



【都市工学専攻】



【先端融合工学専攻】



4.3. 評価委員からのコメント

評価委員の試行に関するコメントを以下にまとめる。

【数理学専攻】

1. 欧米およびアジア各国の研究者との国際共同研究、および佐賀大学での国際研究集会の開催などを例に挙げると各教員の国際活動の活発さがうかがい知れる。
2. 毎年入学式直前に開催される理工学部推薦入試合格者に対する微積分特訓講座の開催も今年度で3回目を迎えた。学部リメディアル教育に資する意味でも継続的な開催が望まれる。
3. 佐賀県内の高校数学教員との懇談会も本専攻は毎年開催している。入試問題を通して、佐賀大学は広く社会にメッセージを発している。本学と高等学校の相互理解と信頼を育成するためにも永続的な活動が期待される。

【物理科学専攻】

1. 教育改善に関する事項については、様々な取り組みがおこなわれている。わかりやすい講義をするために、学期初めに学生の理解度を調査したり、頻繁に小テストを実施するなどして、学生の理解度を定常的に把握する努力がなされている。また、LMSはその有効性を認識しながら、有効な運用方法を追求しており一定の成果をもたらしていることも報告されている。少人数教育を担当する教員は、学生が一方的に教えられる形態から、自分で考える形態を授業に導入する努力をしている。
2. 研究については、昨年同様に著名な国際学術誌に論文発表をしており、良好な実績を残している。
3. 社会貢献に関しては、昨年のようなノーベル賞にちなんだ講演会などを開く機会がなかったことで、目玉的な活動はなかったが、それ以外は例年と同様の活動をおこなっている。ノーベル賞のような突発的な事態がなくても研究の意義を社会に発信するような機会を考える必要があるかもしれない。

【知能情報システム学専攻】

1. 教員1人当たりの講義担当
教授の学部担当科目数は昨年度の7.3に比べて今年度は4.75へと減少している。また、卒研指導学生数も昨年度は5.3名であったが、今年度は4.67名と減少している。修士指導学生数も昨年度の4.5名から今年度4.0名に減少している。このことから、教育に係るワークロードは全体に減少している。しかし、博士指導学生数は昨年度の1.3名から今年度2.17名へと急増しており、大学院重点への取り組みの現れの一端と考えることができる。ただし、教員間の差が甚だしく極一握りの教員の教育業績が平均値を押し上げている事実がある。今度、教員全員のアクティビティを高める必要がある。
2. 過去5年間（H17.4.1～H22.3.31）の発著書、論文等の発表実績

教授、准教授・講師、助教の平均学術論文数は 22.17、21.20、0.67 であり、また、平均著書数は 1.33、1.20、0.00 であった。昨年度から漸増傾向にあると言える。研究のアクティビティは高いと言える。ただし、教員間の差が甚だしく極一握りの教員の研究業績が平均値を押し上げている事実がある。今度、教員全員のアクティビティを高める必要がある。

3. 国際・社会貢献

国際交流の領域におけるアクティビティは不活性と言わざるを得ない。JICA研修「インドネシア遠隔教育コンテンツ開発コース」コースリーダー（教授）講師（准教授、講師、助教）および求めに応じて実施した、在インドネシア大学におけるキーノートスピーチ（2件）が国際交流実績として評価できる。（教授）ただし、教員間の差が甚だしく、極一握りの教員の国際交流業績が平均値を押し上げている事実がある。今度、教員全員のアクティビティを高める必要がある。

4. 組織運営

理工学部各種委員の担当および全学委員の担当を全教員が行っている。また、省エネ、省資源などの活動に全教員が積極的に参加している。さらに、理工学部長としての組織運営（教授）、教育担当理事補佐としてのポートフォリオ関連業務の推進（准教授）に貢献する教員もおり、これら教員のバックアップ体制を知能情報システム科全体で整えて臨んでいることは評価できる。組織運営領域においては義務以上の貢献を果たしている。

5. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

- 1) 教育改善、共同研究、社会貢献に関する取り組みが多数報告されるようになっている。
- 2) JABEE 認定を受けているため、特に教育改善について教員各自の努力が積み重ねられていると思われる。
- 3) しかしその影響か、研究実績が低調である教員が散見される点は今後の課題である。
- 4) 国際交流領域におけるアクティビティの活性化が必要である。
- 5) すべての領域において教員間の差が甚だしく極一握りの教員の業績が平均値を押し上げている事実がある。今度、教員全員のアクティビティを高める必要がある。

【循環物質化学専攻】

1. 機能物質化学科では、教員個人がそれぞれ発揮できる領域において優れた成果を挙げており、全体的に見て各領域において学科として優れた貢献をしていると判断できる。学部教育においては高い評価を受けた JABEE 教育を継続し、実質のある教育を行っている。大学院教育においては、博士後期課程においても多くの学生を指導しており、着実な教育・研究成果を挙げている。また、エコアクション等の安全管理にも当学科は学内で先導的活動を行っている。
2. 当学科では総合分析実験センターと密接な協力関係を維持しながら教育・研究を行ってきたが、近年、同センターの大型実験機器の老朽化が目立ち、実験に支障をきたしてい

た。幸いに平成 20、21 年度補正予算で大型機器のいくつかについて更新が認められたので、今後の教育・研究の発展に弾みがつくものと期待される。

【機械システム工学専攻】

1. 機械システム工学科の教育プログラムは日本技術者教育認定機構の JABEE 認定を受けており、質の高い教育が保証・維持されている。これは教員の日々の研鑽により導かれた結果といえる。この JABEE 認定プログラムは継続的に点検・改善が必要であり、定期的に日本技術者認定機構による審査が行われる。平成 22 年 10 月には継続審査が実施される。個々の講義については、定年退職や定員削減などで教員の担当科目数が増える中、各教員が学科の目標に沿って学生を育成しようとする努力が見られる。
2. 大学院教育に関しては、講義での専門知識の修得に加えて、丁寧な研究指導による学生の能力の向上が図られている。
3. 研究の面では、国内外の学会などでの活発な論文発表を積極的に行うとともに、研究費については、科学研究費補助金だけでなく、共同研究や奨学寄付金、財団などの研究助成などの受け入れについても積極的に取り組まれている。これらの実績から、民間企業等が機械システム工学専攻の研究へ、高い関心を持っていることが分かる。
4. 社会貢献・国際交流では、学会等の役員および委員会委員として活動し、また講演会、研究会なども精力的に開催している。さらに、外国人研究者の受け入れや、国際会議における発表も積極的に行なわれている。
5. 上記 1.～4.と自己評価結果を勘案して、全ての教員は各自の活動の自己評価を適切に行なっていると判断できる。

【電気電子工学専攻】

1. 平成 22 年 4 月 30 日締め切りの Web からの個人評価データ入力に対して、専攻内で未入力教員が 3 名もあり、個人評価の集計に支障をきたした。
2. 定年退職間近の教員に大学院進学者が集まったため、学生の指導に支障を来し、当該研究室のそれ以外の教員に負担がかかり、その教員が自分に厳しい評価を下した結果となっているが、今後、専攻内で特定教員や研究グループへ学生の集中が起これないように、研究室受容定員などを決める必要があると痛感した。
3. 長い間、教員人事が滞っていたので、教員の庶務、教育研究に対して負担が多大になっており、教育ならびに研究活動に支障を来している教員もいる。
4. 自己評価が極端に厳しい教員と極端に甘い教員がいる。

【都市工学専攻】

1. 教育について：IT ツールなど多様な手法による講義の実践が平成 18 年度から増えてきている。学生の学会発表と受賞数は概ね前年度と同様である。また、大学及び理工学部・工学系研究科が主催する F D 活動の参加について、顕著な改善は見られず、意識改

革を含む改善の余地が残されている。

平成18年度からコース制（都市環境基盤コースと建築・都市デザインコース）を導入し、本年度（平成22年3月）に最初の卒業生を輩出した。卒業生へのアンケート調査によれば、学期毎に変動はあるものの、72%~85%の学生が在学中の修学に充実感を覚えている。また、専門科目の履修に関して94%の学生が希望どおりの科目が履修でき、79%の学生が履修に満足していることが明らかとなった。コース制の下での教育は一応の評価を得た。コース配属方法については28%程度の学生が、卒業研究室配属方法については、旧カリキュラム制度の学生への経過措置があり2回実施せざるを得ず22%程度の学生が何らかの不满を覚えていることも明らかとなり、専攻内に設けた小委員会にて改善策の検討を開始したところである。大学院進学数が定員割れを起こした。主たる要因は公務員との併願者が入学を辞退したことによるものであるが、全教員が進学の意義についての学生への説明を重ねる必要がある。

2. 研究について：原著論文数について、ほぼ例年並みの発表数ではあるが、研究分野や研究テーマによって論文数にばらつきがある。英文原著論文数が多くなり、留学生受け入れに併せた研究活動が活性化している。

科学研究費などの外部資金は年間で2500万円程度（分担を含む科学研究費が96%を占める）とほぼ学科予算と同程度を獲得している。今後、効率的な運用に加え、一層の強化が必要である。

3. 地域・国際貢献について：社会基盤整備、環境保全等を学問体系とする学科の性格上、全教員が各種委員会や審査会などを介して地域・社会的に貢献している。建築・都市デザイン分野では、地域連携デザイン工房の教員と連携した外部との交流を含めセミナーや作品展示会等の開催で活発な活動を行っている。

また、外国からの教員・研究員・大学院生の受け入れや国際的共同研究を継続的に実施し、低平地沿岸海域研究センターとの連携や協力関係の維持しつつ、国際・学術交流を行っている。

【先端融合工学専攻】

1. 教育に関しては、評価点や達成率の平均値も高く、担当科目数も他大学教員よりも多い。また、多くの教員がFD講演会に参加したりする等、教育改善に対する工夫と努力が見られる。
2. 研究に関しては、各教員が多くの研究成果を出している上、外部資金の獲得も多く、受賞実績もある。各教員の評価点や達成率の平均値も高く、十分な成果を挙げていると思われる。
3. 社会貢献・国際交流に関しては、多くの教員が国際パートナーシップに参加している上、多くの学会や地域の協議会・審議会の役員等をこなしている。評価点や達成率の平均値も高めの値であり、社会貢献や国際交流に対する理解と努力が感じられる。
4. 組織運営に関しても、全教員の積極的な関与が見られ、各教員の評価点や達成率の平均

値も高い値になっている。

5. 上述の理由により，全ての教員は各自の活動の自己評価を適切に行っていると判断する。

平成22年度工学系研究科評価委員会委員名簿

委員長	林 田 行 雄	(研究科長)
委員	古 賀 憲 一	(副研究科長・評議員)
委員	渡 邊 訓 甫	(副研究科長)
委員	渡 孝 則	(副研究科長)
委員	吉 野 英 弘	(佐賀大学評価委員会委員)
委員	船久保 公 一	(佐賀大学評価委員会委員)
委員	後 藤 聡	(教務委員会委員長)
委員	前 田 定 廣	(数理科学専攻長)
委員	杉 山 晃	(物理科学専攻長)
委員	新 井 康 平	(知能情報システム学専攻長)
委員	北 村 二 雄	(循環物質化学専攻長)
委員	宮 良 明 男	(機械システム工学専攻長)
委員	古 川 達 也	(電気電子工学専攻長)
委員	石 橋 孝 治	(都市工学専攻長)
委員	木 口 量 夫	(先端融合工学専攻長)
委員	志 波 政 孝	(工学系研究科事務長)